

ト

トビケラとは、幼虫期を河川上中流や池で生活する水生昆虫であり、幼虫は砂礫や植物片でミノムシの様な巣を作り（例外はあるが）、やがて蛹となり、羽化して空中中に飛び出し、産卵して一生を終える水生昆虫である。

トビケラ類の生活様式は非常に多様で、その研究者は数多い。また、幼虫・成虫ともにヤマメやイワナといった渓流魚の重要な餌でもあることから、フライフィッシングを趣味とする人々の中にも地道な研究者が多いことで知られている。

本書は、外見からはフライフィッシングのHow to本といった印象を受けるが、著者に水生昆虫学の権威である谷田一三氏と野崎隆夫氏、フライフィッシングをきっかけにトビケラの研究を続けている田代忠之氏と田代法之氏が名を連ね、あくまでトビケラを中心とした内容にこだわったことが窺える。ページをめくると、トビケラ類の流下及び羽化と渓流魚の捕食行動との関連性にはじまり、トビケラ類の生活史、そして代表的な50種類のトビケラの説明とそれをモデルにした毛バリが掲載されている。また、説明の部

CADDIS



トビケラとフライフィッシング

谷田一三・野崎隆夫  
田代忠之・田代法之 共著

発行 廣済堂出版 定価 13,000円

分では一種ごとに分布、形態、生態について詳しく述べられており、幼虫、蛹、成虫の美しい（人により好き嫌いはあるが）写真も掲載されている。今までのトビケラの研究の一つの集大成ともいえる書籍である。

私達が仕事で水生昆虫の同定作業を行う際には、通常、検索表にそって種の同定を行っている。しかし、検索表は類似したグループの中から種名を決定するために、水生昆虫の体の一部分の構造の差異を見ることが多いため、検索表からは種の全体像は浮かびにくいものである。現

に、検索表で得た印象と実物を見た時の印象の違いに驚くこともしばしばである。種の特徴というのは体の部分的なものだけでなく、それらをトータルした全体のイメージも曖昧な様でいて実はとても重要なものだと感じている。その点、本書のように生体の写真が掲載されていると、同定作業で「検索表に記された部分的な特徴だけではイマイチ確信に欠ける」といった場合に非常に参考になることが多い（頭っから絵合わせ的に写真を頼りにするようでは調査者失格だが）。

水生昆虫類の分類は陸上昆虫とは別に、独立して発展してきたため、未だ成虫と幼虫の分類が一致していない種が多く、幼虫と成虫の姿が結びつけにくいグループであった。トビケラの幼虫と成虫の姿が同時に、これほど多種掲載されたのは本書が初めてではないかと思う（欲をいえば現在分かっている全種を掲載してほしかったが）。

フライフィッシングという娯楽の分野ではあるが、このような書籍が出版されたことは非常に有意義なことといえるのではないだろうか。

（本社自然環境調査室・福田宏）

INFORMATION 『いもむしのうんち』が「課題図書」に選ばれました

News Letter vol.2 で紹介した、当社企画編集絵本『いもむしのうんち』が青少年読書感想文コンクールの課題図書（小学校低学年向け）ほか、以下の推薦を受けました。（ ）内...主催団体

- 第42回青少年読書感想文コンクール課題図書（全国学校図書協議会＋毎日新聞）
- '96 出会いの本50冊（子どもと本の出会いの会）
- SLBC 選定図書（学校図書館ブッククラブ）
- 静岡県すいせん図書（静岡県子どもの本研究会）



# 「開発と保護」 より良い方向をめざし 話し合いの場を

第11回雁のシンポジウム 1996.3.9 ~ 10

於 秋田県能代市 主催 日本雁を保護する会・雁の里親の会

シンポジウムには、北は北海道、南は神奈川県から60〜70人ほどが参加し、あちこちでガンの話が飛びかかっていました。半分以上が男性で、30代から50代ぐらいの人がほとんどでした。参加者の大半が雁を保護する会の会員で、あとは地元野鳥の会や自然観察員の人達という構成で、一般参加の人は見当たらず、そのうえほとんどの方が以前参加したことがあるようで、皆知り合いどうしという状況の中、一人さみしく周りの話に耳を傾けながら始まるのを待ちました。

## 後

半で大きな問題となったのは開発によるガンの生息環境の減少です。現在、日本各地で開発が進みガンの越冬できる場所は限られてきています。また、国の減反政策により水田が小麦畑に変わり、それをガンが食べてしまった為に農家が多大な被害を被ったという報告から、餌となる落ち穂がたくさんあり、なおかつ安全に休める水場のそろった環境の維持が、ガンが生活していくうえで重要であるという意見ができました。また、生息地に道路を造った為にガンがまったく来なくなってしまうという実例を挙げ、「開発が進むことでガンは次々と住みかを失い、そのうち日本からガンの姿が消えてしまうことも考えられる。そのような事態にならないよう環境維持に力をいれなければいけない」というような話が随所で聞かれました。

行政・保護団体・地域住民の三者による話し合いの場があまりに少ない

人が自然保護に関心をもっている中、行政の対応が追いついていないのではないかという話ができました。開発計画の際、行政・保護団体そして地域住民の三者による話し合いの場があまりに少ない、もっとたくさんの方の意見を聞くことで良い方向に進むのではないかと、というのが多くの参加者の考えのようです。私も何か方法はないかと考えたものの、やはりそう簡単には思い浮かびませんでした。しかし、これを機にこのような開発に関わる自然保護の問題について勉強していこうと考えています。

今回参加者のほとんどが会員ということで、どちらかというと現状報告会といった感じで、質問や意見の少ない静かなシンポジウムでした。ガンの渡りのルートなどはかなり力をいれて取り組んでいるようなので、もっと一般の人（特に学生など若い人達）にアピールしていくと良いのではないかと思います。

いろいろと勉強にもなり、たくさんの方と知り合いになれ、楽しい2日間をすごせました。ある人が「こういう会というのは全国各地のいろんな人と友達になるためにあるんだよ」と言った言葉が印象的でした。

（本社業務推進室・小野由夏）

雁を保護する会 事務局  
〒989-55 宮城県栗原郡若柳町  
字川南南町16（呉地正行方）

## 今

回のシンポジウムでは、主に開催地である小友沼及び八郎潟を中心に、前半は日本に渡来するガンの種類・数・渡りのルートについて報告され、後半は各渡来地での現状報告と、開発によるガンの生息環境の減少、農業とガンの関わりなどの問題について討論が行われました。

前半ではガンの渡りのルートについてかなり詳細に報告され、まだガンに関してほとんど知識のない私にとってはかなり興味深い内容でした。

雁を保護する会では、ロシアやアメリカと共同でガンの標識調査を実施しており、標識鳥の多くが日本の各越冬地で確認されています。今回も観察時に2羽の標識鳥（オオヒシクイ）を見ることができました。また、マガンに関しては人工衛星用小型位置送信機を用い、より細かな渡りのルートもわかってきています。このような調査が長く続くことで次々と新しい発見があるのでは、と期待しています。

## し

しかし、具体的にどうするかとなるとなかなか意見が出ず、司会者が場をつなげていくのかなり苦労していたようです。確かに開発と自然保護という問題になると、開発側と保護側どちらも自分達の考えを少しも変えようとしないうちに、いつまでも平行線のままという事が日本各地で起こっています。だからといって実際は前述のように、なかなか良い意見は出てこないのが現実のようです。

その原因の一つとして、現在多くの